

2010.7.17

生誕150年

最後のシンフォニスト マーラー

第1回

プログラム

今年はショパンとシューマンに加えて交響曲の歴史上最後に位置するシンフォニスト、マーラーの生誕150年に当たります。今日、マーラーの作品はコンサートプログラムでも頻繁に取り上げられ、一時的なブームではなく、すっかり定着した感があります。「やがて、わたしの時代が来る」と予言したマーラーの言葉通りになったわけですが、その転機となるきっかけの一つを作ったのが、1971年、イタリアの名匠ルキノ・ヴィスコンティが監督した映画「ベニスに死す」であると言っても良いと思います。この作品では、交響曲第3番の一部や特に第5番のアダージェットが効果的に使われ、マーラーに対する関心、評価が高まり、それ以降、録音やコンサートが急激に増えて行った事実は見逃せません。

マーラーは現チェコのカリシュト(当時はオーストリア領)で1860年7月7日にユダヤ人の家系に産まれました。作品は生涯番号付の9曲の交響曲と未完の第10番、大地の歌を含めた管弦楽伴奏の歌曲、声楽曲で殆どを占めていますが、その多くが編成の大きい長大な作品となっています。マーラーの音楽の特徴は、自然への賛歌、青春への憧れと惜別、愛の苦悩と喜び、行き着くところ、「生と死」というテーマに至る実に人間的な香りを持った音楽であると言っても良いと思います。何回かのシリーズを予定していますが、今日はその第1回目です。

交響曲第1番は最初5楽章の交響詩として発表されましたが、後に第2楽章の「花の章」を削除し、4楽章の交響曲として改訂されました。「さすらう若人の歌」は第2曲と第4曲が交響曲第1番に引用されています。これら繋がりをを持った3曲はマーラーの若き日の瑞々しい青春讃歌であり、美しさと情熱に魅了される名曲です。なお、マーラー特集中は交響曲と歌曲に片寄ってしまうため、大曲の合間に一息入れて頂く目的で、「珠玉の小品」というコーナーを設けました。合わせてお楽しみください。

\*\*\*\*\*

クスタフ・マーラー (1860~1911):

歌曲集 “さすらう若人の歌”

1. 彼女が嫁ぐ日 2. 朝の野原を通ったときに 3. 私の胸の中には燃えた剣が 4. 彼女の青い瞳が  
ウォルフガング・ブレンデル (バリトン)

ジュゼッペ・シノーポリ指揮ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団

(1981.10.12 ベルリン、フィルハーモニーホールでのLive) ~米倉ライブラリーから~

花の章

若杉 弘指揮NHK交響楽団

(1995.5.12 NHKホールでのLive)

珠玉の小品 コーナー

ピョートル・チャイコフスキー (1840~1893):

憂鬱なセレナード op.26

イーゴリ・オイストラフ(ヴァイオリン) / ナタリア・ツェルトサロヴァ(ピアノ)

(1992.5.16 東京芸術劇場大ホールでのLive)

\*\*\* 休憩 \*\*\*

珠玉の小品 コーナー

アントン・ルービンシュタイン (1830~1894):

天使の夢(「カメン/イ・オストロフ-24の肖像」 op.10より第22番)

シューラ・チエルカスキー (ピアノ)

(1993.6.15 サントリーホールでのLive)

クスタフ・マーラー (1860~1911):

交響曲第1番ニ長調 “巨人”

小澤征爾指揮ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団

(1980.2.3 ベルリン、フィルハーモニーホールでのLive)